

—学術講演—

社会学の視野について

— 時 間 と 社 会 —

蔵 内 数 太

倉田学部長挨拶並びに講師紹介

秋も深まってまいりました今日、私達がかねて尊敬申し上げております蔵内数太先生をお迎えして、社会学部主催の秋の学術講演会を持つことが出来ましたことを心からおよろこび申し上げます。

関西学院社会学部は昭和35年に蔵内先生や大道先生を中心にして新しい一つのビジョンにもとづき、時代の要請を受けて作られた学部であります。

それから20年の歳月が流れ、今年の3月末が丁度創立満20周年になります。昨年度は春と秋の学術講演及び3月末には学部の記念論文集を刊行することができました。このような記念すべき時期に当たりまして、我々はますます学部のアカデミックな水準を高め、前進していくことをたえず念願しているわけでありますが、その一環として今日は蔵内先生をお招きしてお話を聞きたいと思っているわけでございます。

蔵内先生につきましては社会学を多少とも勉強している人なら特に御紹介しなくとも、御存知のことだと思いますが、簡単に略歴を申上げますと、先生は東京大学の社会学科をお出になりました後、九州大学で永く教鞭をとられておりましたが、大阪大学に社会学科が出来た際に、大阪大学にお移りになり、それから先程申しましたように昭和35年には関西学院社会学部をお創りになり、昭和42年に定年退職されるまで本学部におられたわけであります。

しかも実際には昭和26年から関西学院文学部社会学科の大学院で教えておられましたし、昭和42年に定年退職をなさりました後もずっと今年まで、大学院の方に講義をもっていただいているわけであ

ります。これらのことからしても先生と社会学部との関係がいかに深いものであるかを御理解いただけることと思います。

先生の学問的な業績ということにつきましては、私がここで述べるまでのこともないかと思います。

先生は高田保馬先生や新明正道先生と肩を並べる第一級の理論社会学者であり、しかも高田先生の社会学とも、新明先生の社会学ともまたがった非常にユニークな理論体系をお持ちであります。

最近、現象学的社会学、現象学的な方法をもちいて社会学的な研究を行うというやり方が盛んになってまいりましたが、蔵内先生の社会学理論、蔵内理論のもっとも根底にすわっているのは、現象学的な思考であります。近年、復活してきた現象学的方法をずっと以前から御主張になっておられるという意味において、先生は伝統的であると同時に、非常に現代的、今日的な理論社会学、ユニークな理論社会学を体系化された方でございます。

先生にはたくさんの著書がありますので、ここでいちいち紹介することも出来ませんけれども、現在先生の全集が刊行中でございますので意欲のある方は全集をお読み下さい。

それでは蔵内先生のお話を一緒にうけたまわりたいと思います。

I 三つのレベルの社会

倉田学部長から大変なご紹介をいただきまして、誠に話しくなりました。私べつに立派なお話ができるわけではございませんので、あまりご期待を持たないで聞いて頂きたいと存じます。「社会学の

「視野」という題を掲げていますが、社会学の領域というのも同じです。視野としましたのは、視るという字があるからです。視るということは、物の見方、特に社会学における対象の扱い方で、そういうことを中心にして社会学の対象を考えてみたいと思います。そして話の最後に、それとこの社会学部の *curriculum* の構成との関係に及びたいと思います。

まず我われが、社会と言いますときには、そこに少なくとも 3 つのレヴェルが分けられます。第 1 は、英語の定冠詞のついたソサイエティといってよいでしょう。ここで *the society* というのは、社会の本質といいますか、社会のギリギリの内容というか、そういうようなものです。これはもう、間違ってとらえることもございますが、本来はひとつしかない意味規定です。

第 2 は、不定冠詞のついたソサイエティ、或は、勿論複数形にしても結構です。*a society, societies* です。これはいろいろな社会、学校も社会であるとか、家庭も社会であるとか、政党も社会であるとか、というような意味の社会、さまざまな集団としての社会です。これを第 2 のレヴェルの社会と考えていいと思うのです。

それから第 3 のレヴェルの社会といいますのは、日本の社会とか中国の社会とかいうような、普通我われがよく言う大きな全体的な社会。非常に複合的な社会です。ただし複合ということになると、集団といえども多くはすでに複合的です。が、その複合に、或る全体的な意味が見られるもの、すなわち全体性がある、包括性がある、歴史的個性の多い、特別なレヴェルで考えなければならない大きな社会です。これが第 3 の意味の社会であります。仮にこれは大文字 S を使った *Society* というように区別していいと思います。そうすれば、ここに 3 つのレベルの社会が考えられるのです。

II 社会の本質規定—社会本質のとらえかた、他我の認識、自覚の後至性の意識、視界の相互性

まず、この第 1 の社会から申しますと、社会を定義する場合によく相互作用という言葉が用いられています。いろいろな社会の現象というものを観察すると、そこに人と人との相互の作用や相互関係がみられます。そこで、これこそが社会の一番基本的な事実であるという考え方方がおこって来ます。これには私も必ずしも反対するものではありません。具体的な社会の現象を調べる場合には、この観点で充分とも云えます。ただ社会の本質を定義する場合には、それでは困るのです。何故困るかと言いますと、簡単に理屈を言いますと、相互作用を考えるときには作用する主体というものが、まず与えられていて、そしてその主体間に作用が當まると、そこに社会が始まるということになります。つまり作用とか関係とか言う前に、社会的でない実体というものがまず前提とされていることになります。こうなりますと、人間は社会的存在であるという規定はどうなるのか、という問題が起こってくる筈です。

もともとこの相互作用という言葉は、我われが客観的世界を研究し、或は観察する場合に、ある事物とある事物との関係をみるという場合に言われるものです。従って、そういう現象に対して、見る我というのは別の所にいるわけです。2 つの事物が交渉しあっている、それを離れて第 3 者の位置に立って、これを眺め、あああそこに相互作用の関係がある、というふうに考えるわけです。

ところが、この社会の本質という関係では、そういう 2 つの事物という中に自分というものが入っている、A と B で云えば、自分が A であり、または B であるということになると思います。この A と B の関係というのは、A から B への作用、B から A への作用というものがありますと、それが相互作用であります。実は A とか B とかの位置に自分をおいて考えなければなりませんのが社会の本質です。これ

は第3者の位置でもって外部から関係を見ているのではなくて、自分がそこに入りこんでいるのです。社会は自分の体験というものの内に与えられているのです。そういう点から考えますと、社会とは何ぞやというものが既におかしいのであって、いかなる人間といえども、社会生活をしている以上は、社会とはどういうものであるかを体験的にすでに知っているのです。その知っているという所において、社会があるわけです。体験において、社会があるのですから、社会の本質論はその体験を直視することから出発すればいいのです。ところがこの直視と言うことは、言葉は簡単ですが、なかなか難しいことなのです。社会は体験において規定されるのですが、学問的規定は論理的でなくてはなりません。だから論理的に自分の体験というものを開き出してみると、これが社会の本質を考える場合の方法であります。

先程もお話をございましたが、現象学の方法というのは、正にこのばあいの方法に属するものであります。そう考えますと、ではどういうふうに、社会関係は規定されるのか、相互作用に代わる社会の本質規定は何かということになりますが、結論的に云うと、ここに視界の相互性ということが提唱されており、私は大体それに従っているのです。視界と言いますのは、我われが視ている空間のことであります。相互作用というのは、見る見ないに拘らず客観的にあるところの空間の中で、事物と事物との間に演じられている現象であります。ところが社会関係は体験事実で、客観的な空間の内において行われるものではありません。我と汝の関係は互いの体験関係であり、互いの体験空間の中の所与です。この体験空間を視界と言います。視界とは、私どもが視ている空間です。例えば、私はいま正面の時計を見ておりますが、皆さん方にはそれは見えない。目は右を見ると左は見えない。前を見るとうしろは見えない。これが我われの視界的現実であります。視界とは自分の眼というものを中心として、その前に広がっている空間です。遠近法的に事物は配置され

ていて、近い所の物は大きく、遠方の物は小さく見える。こういうように体験されているのが私どもの現実の空間であります。勿論これは、客観的には間違った空間把握で、近い所の物が大きいかと思っても、遠方の小さい物もそばへ行って見れば、やはり大きいのです。客観的には、視界的体験は間違いであります。従って、そういう空間概念をもとにして、客観的世界、自然界なんかに対処することは絶対にできない。しかしながら視界という空間も厳として動かせない現実の体験空間なのです。我われには視界的にしか物は見えないので、ですからそういう体験空間というものの意味は、体験の学問にとっては非常に重要となります。

そこで今AとBという2人の関係を考えますと、このAとBとは実は相互作用の関係にあるのではなく、相互的な視界関係にあるのです。視界が重なりあい、或いは交差しているという関係にあるのがAとBとの社会関係であります。これが視界の相互性であり、これが社会関係の基本的な図式であります。こういう視界と視界とが両方でもって交差し合っているというところに社会があるのですが、その視界というものは、AなりBなりの主觀を離れては絶対に考えられません。だからAとかBとかいうこの個人的な体験中心というものと、両方の間に営まれているところのからみあいの関係というものとが同時に認められているというところに、この視界の相互性の概念は意味を持っているわけであります。従ってそういう所から、個人と社会とはともに併存的に考えなければならない。個人を無視しては社会を考えられないし、また社会を無視しては個人は考えられないという大きな基本命題が成立します。そういうふうに私どもは考えております。

この視るということについてですが、元来視るということは視ないということであるといえます。或る物を視るということは、他の物を視ないことであり、前を視ることは後ろを視ないことであり、右を視ることは左を視ないことであるからです。或物を視ることは他の物を視ることを止めることです。こ

れをジンメルは、視ることは放棄すること (Weglassen) だといいました。これはあまりに卑近なことでありますが、注意すべきことだと思うのです。仏教には止觀という言葉があります。止觀というのは、やめる、とどまるという文字と、觀、観るという字との結合です。天台宗が特にこのことばをよく言います。止觀とは我われが物を觀察するとき、一面において何かに眼をとめると共に、他のものを見ることを拒否することです。尤もこの天台の教学の止觀ということについては、たくさんの意味があるので、いま立入る限りではありません。

ところで今私どもが、私と汝、AとBという場合に、仮にAを我と考えますと、Bというものは汝であります。AがBを視ている、体验している、BはAを視ている、とそこに視界の相互性ということが云えますが、何故我われは自分が他人を視ているように、他人も自分を視ていると云えるのだろうか。自分に心があるのと同じように、他にも心がある、こういうことはどうして云えるのかという問題がまず起こってきます。所謂他我の認識という問題であります。これについてはいろいろの理論が昔からあったのでありますけれども、大体今日は他人が内的な存在であり、自分と同じように心を持つ存在であるということは、人間にとて本来的な認識であるとされています。体验を自分のものと他人のものとに分け、他我よりは自我の方が確実な存在のように思い、他我の存在を自我の存在から導き出したくなるが、実は自他を超えた「われわれ」が前なのだということは、私どもの自覚からも考えられます。人間は自分の生まれた時を意識しません。「投げられた」存在と云われるわけです。そして生まれてやや大きくなつて始めて自覚をもつのです。しかし同時に自覚の後至性の意識が伴います。この意識には、我われは自分でなく他者の力、他者の庇護に依存して来たという意味が含まれています。投げられたのは母親の柔い腕の中などであったのです。そこで「庇護された」(ボルナーの *Geborgenheit*) ということは主体性と共に自我の重要な規定と云えます。主体性は独

立性でありますが、他我との関係では自我はまた「捨てられた」存在 (*Verlassenheit*) とも云えます。「独り棄てられて」とは謡曲「娘捨」の句ですが、自我の深刻な把握にはこれも忘れられません。ただ根本的には我にとって汝という存在は自明的に内的な存在としての所与であるということに留意しておきましょう。全体的な体验、自分の体验と他人の体验を区別しないような体验の方が先にあり、やや我われの経験が進んでから、これは自分に属する体验、これは他人に属する体验というふうに分けるのだというふうにいま考えられています。他我认识の直接性ということが、一般に言われております。そういう所から社会の本質の規定も導き出すというようになっています。

要するに我われは自分の前に人がいると、その人も自分と同じような体验主体であるということを前提しているのです。そこで先ほどの視界の相互性という関係が生じて來るのです。AとBとの関係は、Aの視界一体験の内にBがあり、同様にBの体验の内にAがあり、両方の視界がからんでいる、そこで社会の本質は視界の相互性としてとらえられるというわけであります。視界のからみ合いの関係に社会があるのです。しかしこの関係は、AなりBなりの主体を離れては考えられない、言い換えれば社会と個人というものは本来本質的に結びついているものであつて、個人をはなれた社会、社会をはなれた個人というものは原則的にはあり得ないということになると思うのです。

III 体験空間と体験時間一両者の関係、実存の現在

ところで今空間体验のことを申しましたが、空間と並んで重要な問題はもちろん時間であります。時間と空間とは、あらゆる哲学の基本的問題です。ですからカントにおいても、空間・時間の問題がまず『純粹理性批判』において取扱われました。我われはさまざまな外界の事物を知覚しますが、時間や空間というものは知覚によって知ったのではない。知

覚そのことは時間空間の前提なしにはできない、だから、それはもう経験に先だって我われに具わっているところの直觀形式である、としなければならないとカントは言いました。これは非常に基本的な問題であります。カントの説はベルグソンその他によってさまざまに批判されて来ましたし、また特に最近時間論は、自然科学、精神科学を問わず非常に重要な問題になってきています。

元来時間と空間というものは言葉では他の事物と同様に云えますが、他の事物の把握のように把握出来るものではありません。時間も空間も無限です。無限なものは私共の認識の対象にはなし得ません。無限とは限界が考えられないという消極的な規定に過ぎません。そこでカントでは時間・空間は主観の側に考えられたのです。有限なあらゆる事物の認識の前提として考えられたものです。ところで体験世界を問題とする社会学にとっては、もちろん時間・空間そのものが問題ではなく、体験的な時間・空間です。そこでまず視界が云われましたが、いわゆる自覚の後至性の意識という概念には、時間が含意されていますから、体験空間と体験時間が関連的に考察されなければならなくなりました。

ところで視界体験とは、自分が目の前の空間的事物をとらえているというだけで、そこにはまだ時間という観念は出てきません。しかし人間は動く存在であります。われわれは右を見る事もできれば、左を見る事もできる、左右への運動の都度自分の視界は動いていきます。視界は詳しく言いますと、ひとつの地平というものがありまして、その地平に対して自分を中心として扇形に広がった形でとらえられている空間です。見るということは地平のうちのどれかの対象に向って焦点を合わせてしていることです。遠近法的に事物が配列されている中のどれかに焦点を合わせて視ているというのが、我われの空間的対象をとらえる場合のやり方であります。そういう地平と言いますものは、われわれが動くと共に動いております。右を視たり、左を視たり、前を見て後ろは視ないとか、後ろに向いて前を視ないとか、

さまざまの視界が動きによって開けてきます。こうして視界を動かすことで我われは前も横も後ろも、ひととおり視ることになります。このような動きといふものにおいて、我われは時間というものを体験するわけであります。時間なしには、動きはあり得ないことはいうまでもありません。視界を動かしながら一回転するということによって、われわれは自分の立っている場というものの認識を得ます。この場の把握によって単位時間という観念も、起こってみると云えます。自分の身体を一回転することは、自分の周囲の空間というまとまったものの体験となりますから、等速の一回転、二回転は時間の区切となるからです。

今日はいろいろな科学で時間論というものが行われています。例えば物理学上、生物学上の時間論とかがそれです。特に生物の体内時間などは我われの学問にも興味があります。生物は自分の身体のうちにリズムとして時間をもっています。例えばムササビなどは昼暗い処においても、やはり夕方になると活動を始めるといいます。

人間という生きものの体内時計は別にし、その社会におきましても、我われは暦という時間制度を持っております。どうして我われは方向の分けかたとか、暦とかいうものを考え出したのか、こういうことに社会生活が大いに関係があることは、デュルケムなどの早くから説いているところです。しかし、こういう時間の論は、いかにも生物や社会に相関的に考えられますが、それが対応しているのは、皆カントが基礎づけしようとした自然科学的、客観的な時間論であります。ところが体験的事実としての社会を取扱う立場で根本的に問題となるのは、それと異なった時間であります。我われの生きている時間は現在において過去や未来を含んでいるという在り方の時間であります。人間は過去を記憶し、未来を期待しているという構造を持った現在を生きているものです。客観的な時間というものにはこのようなことはありません。それは一直線に無始から無終に向かって経過しており、逆行することのない時間であ

ります。我われの生きている時間というのは、これと異なり過去を含み未来を含みつつ永遠に現在である時間です。そういう時間をどのように考えるかという問題があるのであります。

先程言いましたように、私どもが自分の立っている位置を中心にしてぐるりと一まわりしますと、これに応じて視界は変わってきます。そしてひと回わりすれば1のまとまった活動が終わるわけです。それはひとつの時間であります。その時間のそれぞれの違った段階には違った視界が結びついている、今は前を向いている、こちらを向いた今においては、こちらが見えている、というように、空間が結びついております。こうして時間と空間が結びつくということから、過去、現在、未来というものが非常にはっきりしてきます。今というものと今までとこれからという、そのような区別がはっきりして人間の時間意識が始まってくるわけです。私に対する汝といふものにおいても、やはり同様な時間がある。だから汝に向かって我が立っておりますが、現在相対している汝には、その人の過去、その人の未来への我的関心が含まれています。このようなものとして我は汝を捉えています。こういうのが人ととの関係であります。簡単な理論であります。これはいろいろな場合に重要になってくるところのものです。いま向こうに時計がありますが、私は時計というものが不思議に思われたことがあります。時計は何故円なのだろうか、と。これは地下鉄の車はどうして地下に入れたかという漫才の話のようですが、それは一つの問題であります。私の理解に従って言いますと、やはり時間というものは、円で表現されるのが当然であります。例えば太平洋の真中で船の甲板の上で周囲をぐるりと見回す、そうすれば水平線が円形に現われる、この回転運動において時間体験が与えられますが、その時間というものは、まるい水平線に囲まれている一つの世界に対応しているのであります。

要するに時間というものは無限ですが、有限の時間を生きているわれわれには、その測定が問題にな

ります。測定には単位が要ります。身体を回転させて自分の周囲をとらえる運動に要する時間は速度を一とすれば、時間測定の一の単位となります。この単位は前述の水平線の画く円形で觀念出来ます。そこで時計は円いということになりました。但し、近頃は円い時計でなくて、デジタル時計などがありますが、しかし哲学的に考えると、やはり円い時計をもってどうしてこの時計は円いのであろうかなどお考えになった方が、頭の体操になると私は思います。

先だって東大寺の宝物展がありました。私も行ってみましたが、その中にひとつの鏡がありました。それは三月堂の有名な不空羂索観音の天蓋にはめてあった物ですが、この円い鏡の裏には十二支の動物を表した文様があります。子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥という十二支です。この十二支は何を表しているかというと、それは一方では空間の諸方角を表しているとともに、一方では時の推移の順序を表しております。十二支は丑の年とか午の年とか申の年とかいったように、時間を表わし、またひつじさるとか、いぬとかたつみとかいった風に、方角をも表します。このように時間と空間を相即的に表現しているのが、十二支を円形に配置している鏡の意味であります。これのもっと混み入ったものが正倉院にあります。これは四神八掛十二支背鏡と言います。それには東西南北と四季を表わす4つのシンボルの動物、それから8つの方角と時を表わす易の八卦、12の方向、12の時間の区別を表わす12支の動物、とこういう風な物を彫りこんだ鏡であります。昔の人はやはりこういう風な形で時間や空間というものを関連的に考えていたのだと思います。

近頃盛んに新聞にも広告されました、福岡の考古学者で原田という方が面白いことを書いています。それは神武天皇の東征の時に道案内をした神さまというの、こういう方角を示す鏡であったのだというのです。説の当否は別とし、方角を示す道具と云っているのはおもしろい着眼だと思います。やはり方角ということは、もとより昔の人にとって生きる

上で非常に大事な問題だったと思います。ところで方角の示されている鏡は同時に時間の表示でもあります。今日時計と磁石とは同じ形をしておりますが、時間と方角の別を一緒にしたような鏡背の文様は恐らく時間というものを考える原点を示すものであると言っていいかと思います。

ところでこの時計の示すものは等質な時間であります。同じ文字盤を同じ速さでくり返し、くり返し針は回っている。時間そのものを表現するのならば、同じ盤に固執してはいられません。時間というものは、一直線に無限に続いているですから、無限の長さの物差しのような物を設けて、それに時を刻むのが本当でしょうが、それは出来ないから、時計の針は同じ盤の上を繰り返し動いているのです。繰り返しをやっているから使えるのであります、それだけ時計は人間に近づいております。人間には近づいておりますが、しかし時計が表示するある時というものは、過去と未来を離れ、過去と未来の間にはさまたった点としての時にすぎない。そういう時点を時計はいつも示しております。

ところで人間の生ける時間というのはそんなのではなくて、常に過去、現在、未来というものを同時に含んでおります。私どもの時間の体験というは何であるかというと、これはハイデッガーの言葉を使うとアンヴェーセン（*anwesen*），そこにいること、*absent* に対する *present*，現前です。私どもは現在に現前しておりますが、過去にも現前している、また未来の *vision*，未来の計画、希望という形で、やはり未来にも現前しております。そういうのが私どもの現在で、現前という点においては過去も現在も未来も皆同じであります。だから私どもは現在に過去を持ち、未来を持っているのだということが言えるのだと思うのです。

論語の中で難しいと言われている語にこういうのがあります。孔子が子路という弟子と山へ行ったところが、谷に架してある橋の上に雉子が群れていた。雉子は人間を見て驚いてパッと飛び上がる。しばらく空を舞っていたが、また元の位置に帰って来た。

これを「色みてここにあがる、翔りて而して後集まる」といっているのです。色見てここにあがるというのは、人が來たので、未来に起るかもしれない危険を感じて驚いて上へ飛び上がったということです。これは未来への現前を意味しています。それから雉子は上を飛びながら下の様子を眺める、どうも危険はないらしいというので、また以前居た場所を思い出してそこに集まる、これは現在と過去に現前したからであります。そこで孔子は云った。「山梁の雌雉時なるかな」—山中の橋上にいる雉子を見て時というものをとらえたわけです。ここに実存的な時、時間の本質が示されてあります。過去・現在・未来に現前しこれを統一している現在であります。或は瞬間（*le moment*）であります。永遠の今です。

時計の現在というのは、現在針が指しているところの点であって、その以前は過去であり、いまだ針が来てないところは未来であります。時計の現在は無内容の点です。しかし生ける人間の時間には、いつも過去や未来がいろいろな形で含まれているということになります。ところで、このような時間、深みを持った時間を生きている存在としての人間が、或は互いに愛し、互に憎み合いながら、要するに体験的にかかわり合っているのが社会であるということになります。

人間関係は人格の関係であります。意識や精神を離れては考え得ない事実です。私どもはよく未知の人に会うと名刺を出して挨拶をする、どうぞよろしくと言って面識の関係に入ります。この挨拶は何年何月何日の何時何分かの瞬間的事実であります、それは未来に対する面識関係の設定ということでありまして、未来的な意味を持っております。人格には連續性があるからです。やはりそこに右にのべたような時間というものが、本質必然的に人間関係の要因となっているということになります。こういうような立場から社会と個人の関係、或は社会の本質は考えられねばならないと思います。この本質的意味の社会ということについては、立入った議論をす

れば際限がありませんから、大体私どもの考え方の方向だけをお話してこれで終らせて頂きたいと思います。

IV 二人結合及び集団と時間

さて次の問題はこの人間の現実的な個人的関係です。友人関係とか恋愛関係とかいうようなもの、それから同窓会とか学友会とかゼミの会とかいろいろな人間のグループ、こういう経験的な社会関係の問題が起こってきます。これについてもやはり同じように人格関係が具体的に実現しているものとして扱われなければならないと思います。2人の結合と言いますのは、友人関係を例に挙げますと、あくまでも特定の個人に結びついております。また特定の恋愛関係は特定の人格に結びついている、他人が交替するということは出来ません。恋愛の相手に後任者なんてことは考えられません。相手が変れば別個の友人関係や恋愛関係になるわけです。

ただ夫婦関係につきましては、昔の家族制度、所謂大家族的な意識のあるところでは、妻と別れた後に後妻を迎えるということがありますと、その後妻の人というものはその家において前の妻の座を占めるのです。前の妻の position と role を継承するという意味で、そこに前後の連續性があり、この点に関係の重心がありました。しかし、そうでない場合におきましては、恋愛関係とか友人関係とかいうふうなものは、あくまでも関係が特定の2個人に結びついております。1の個人がいなくなれば、それでもって関係は、記憶以外では断絶してしまうのです。こういうのが2人結合の特徴であります。

さて集団となりますとそうはいかない。集団は何人かのかたまりですから、1人や2人の者が去っていっても、また他の者が前の集団からの連續性を保持してくれています。だから集団には、無名性といいますか、特定の個人、固有名詞を持った特定の個人というものを離れて、その実体が考え得るという特徴があります。しかし2人関係におきましても、さっきの原則に従って個人を離れては2人関係がな

いことは勿論であります、関係そのものはやはり客観的な存在であります。例えば友人関係で、自分Aと他人Bとの関係ならば、自分とBとの関係はこういう関係であるとか、或いは自分はBをこう思っており、Bは自分をこう思っているとか、それをお互いに或程度客観的に共通認識しています。そこでこのお互いの諒解というものが、お互いをまた制約するわけです。二人関係というものが独自のものとして客観的に在るわけです。しかしあくまでもそれは、AなりBなりの個人の関係であります。だから個人性と客観的関係というものが不可分な関係にあるのです。

関係は個人的主体相互の関係で、空間的に云えば線で表現されますが、時間的に云えば未来的です。関係の間に新しい展開が予想されているからです。

集団の場合におきましても、やはり右のような面があります。ひとつの集団はそれを構成している人々の間に何等かの共同意識、何らかの共同の対象的なものの意識があります。例えば関西学院という共同の対象性を意識するからこそ、我われ関学の学生はとか、われわれ関学の職員はとかいう意識が成立してきます。何らかの共同の対象的なものを意識するから、そこに我われという体験が生まれてくるのであります。これは集団を構成している人々の間の心の交流の面、心の一致の面であります。が同時にまた、そうして生まれた“我われ”は強く個々の個人を制約します。自分の仲間は集団の立場を代表して我個人を監視しているという関係にあります。一旦団体が出来ますと、その団体の掟、伝統、風習といったものがその成員を制約し規制するという面があり、また人々がひとつの我われという中に溶け込んでいるという面があり、こういう両面が集団の内にはあるわけです。このような構造を持ったものが大体集団であると考えていいと思います。

集団では複数の人々がいわば同一平面に帰属し、その共同性や秩序が人々に先行している関係があります。そこで集団は空間的には面的であります、時間的には過去的であると云えましょう。

V 全体社会の構成—コミュニティ、オーガニゼーション、コミュニケーション

ところで集団には、対象性の違いによっていろいろな種類が分けられますが、この点をいま省いて言いますと、あらゆる種類の集団を入れてしまうのが、もう一次元高い社会としての全体社会であります。全体社会はまず複合的な社会です。複合的な社会でありますから、それは単なる複合的であります。単に混み入った構造の社会というだけならば、それは全体社会に限らない。例えば村とか部落とか政党とか学校とか、そういうようなものもすでに複合的であります。ただ全体社会の場合においては、人間生活のあらゆる側面がその内に包括されている、或いは包括されようとしています。こういう意味での複合性、すなわち全体性というものが、全体社会の特徴であります。だから全体社会は、一般集団とは次元の異なる社会であるということになります。そういう次元の異なる全体的な社会の一部として、我われは農村を扱い、政党を扱い、企業体を扱い、官僚を扱うということになるのであります。

それから全体社会というものの、もうひとつの大きな特徴は、それが最も歴史性を持っているということです。全体社会の代表は民族ですが、民族は最も普遍化の困難な、すなわち歴史性に富んだ社会です。

右に挙げて来ましたように、社会に三つのレヴェルを区別することは、フランスの故ギュルヴィッヂの言っているソシアビリテ、グループマン、ソシエテ・グローバールの区別にほぼ対応しますが、ギュルヴィッヂは右の順に従ってその歴史性の度合が強まっているということを言っています。これについては大して説明もいらないと思います。

ところで右の全体社会はその構成において、あらゆる人間生活の局面を含んで成立しております。人間の追求するあらゆる価値の種類がそこで出てくるというように規定する人もありますが、それを別な観点から云いますと、全体社会はその構成上 commu-

nity と organization と communication という3つの側面をもつと言えると思うのであります。

community というのは、本来複合的であります。この集団の特徴は、そこに男性、女性、老人、子供など両性やあらゆる年齢階層の人が内に含まれているということです。またそこには様々な職業の人が共存しています。こういう風な性格を持っているのは当然なのです。というのは、community は家族というものが主要単位になっており、人々の生活の小さな場というものの集まりであるからです。つまり家というものの中でもありますから、それは人間の広い活動の基地であるということになります。

そしてそこの人間がどのようにして属しているのか、と云えば、それは基本的には出生によってです。我々は自分の属する小さな community をいろいろ変えることができます。西宮から豊中に引越したり、豊中から枚方に移ったりというように、あちらこちら転々とすることもわれわれにはできます。しかし人は生まれる場所を自分で選べない。どこの村の景色がいいからとか、どこの町が便利だとかで、そこを選んで生まれるわけにはいきません。また自分の生まれる家というものを選ぶわけにもまいりません。あの家には財産があるからあそこに生まれようとか、いうようなわけにはいかないので。生まれてみなければわからない。これは自分の選択の彼方にあります。その意味において、生まれる家もまた生まれる町や村も運命的に決められます。自分の属する村や町をかえることができますが、しかしこれも大体において自分の民族、自分の国という風なもののが範囲においてです。國から國へと移ることは出来ますが、このような選択というものの余地の少い社会が全体社会であります。

community には、生活のあらゆるレヴェルの人とか、あらゆる職業の人とか、あらゆる年齢、或は両性全てがそこにいるのでありますから、それは非常に複合的な社会であります。そういう複合的なものが集まり、要素となり、素材となって作られているのが、全体社会であります。そこで community と

いうのは全体社会の素材であり、同時に全体社会そのものは最大 **community** であります。現在では、これは大体民族とか国民とかそういう範囲になりますが、世界 **community** ということも次第に言えるようになって来ました。もっとも今日の世界社会には、その中にお非常に緊張が多すぎるということも言えますか。

こういう **community** を素材として、その上にあるのが **organization** と **communication** とであります。これは先程挙げました集団において、集団全体というものの拘束、規制、規範の面と集団の構成員の間における心の交流という両面に対応しています。すなわち集団と同様に全体社会においても、全体性という面と社会性、或は関係の心理的側面というものがあるわけで、そこで **organization** と **communication** という要因の区別ができるわけです。

第一の全体社会の組織を作っているものにはいろいろあります。が、一括して言えば、第1に分業があります。産業上の分業は無論であります、文化的な諸領域としての分業もあります。それから階級とか階層とかいうものも全体社会の中において言えるわけです。国家とか政治とかという組織もあります。代表的に言って、この3つのものが、良かれ悪しかれ全体社会の **organization** というものを作っております。何故これが全体社会の全体性を表わすかといいますと、例えば階級についてならば、支配階級と被支配階級、被抑圧階級というようなものは、お互い相手がなければ存在しないわけです。支配階級がなければ被支配階級はあり得ないし、被支配階級がなければ支配階級はあり得ない。それ単独では考えられないところの概念であります。言い換えるならば、それは全体の社会に関して意味をもつものであり、その意味で全体的です。分業というものも同様に、ある分業は他の分業があるから成立するのです。ですからそれはまた他を予想しています。国家とか政治とかいったものは、全体社会的な基礎というものに向かって全体的に力を及ぼしてくるもので

あります。この意味でそれらは全体社会の全体性を代表します。

今、全体社会を考える場合に、これをひとつの円、サークルと考えますならば、その中のいろいろな部分はちょうど **community** としての多くの **section** にあたると思うのです。コミュニティの **section** が多数あり、それが集まって全体社会を作っているわけです。たとえば、西宮市とか伊丹市とか大阪市とかがこのような位置で分かれて存在している、そしてこれらは日本という全体社会の **section** です。

ところが円の中心から分かれている扇形部分、これは **sector** と申しますね。これに当るものがあります。これは広い意味で分業と云います。中心から分かれた部分というものは、全体社会のさまざまな機能をなっている職域、職業を代表しているものでありますから、**sector** は全体社会を構成する専門的、分業的な要素という風に言えると思います。

また階級というのは、円形を横断して画かれた帯、**zone** であります。上層、中層、下層といったようなのは **zone** に当たります。**section** とか **zone** とか **sector** とかいうようなものが、ひとつのサークルとしての全体社会の分化を示しています。

右のそれを明治時代以来皆社会と呼んで来ました。例えば上流社会、これは今日も使う人がありますが **zone** です。また以前学者社会とか教育社会とかいわれたものは、**sector** に当たります。また地域社会という言葉は今日最もよく用いられていますが、これは **section** です。そこで円を区切るいろいろな仕方に対応して社会の概念が考えられるといふことも言えると思うのです。

さて第3番目の全体社会の要素は **communication** であります。これは集団の場合の人々の間にある我われ意識というような心理的なものに対応します。全体社会も構成している人々の間の心の交流というものがなければ考えられません。これが **communication** です。**communication** の関係には勿論いろいろな場合があります。**face to face** の関係もありますし、手紙や電話や電波やいろいろ

な媒体を使う場合もあります。また人間の流動も重要な要素です。動くものである人間は住居を持ってその動きに歛止めをかけている。自分の住居を中心としてその回わりを動いているというのが通例人間の生き方であります。しかし、そういう住み方をしないで流動することを日常事にしているような人が特に昔は重要でした。それを流動人と言っていいと思うのですが、その持つ非常に重要な役割というものについては、前に何回も書きもし話しましたから、ここでは省略しますけれども、それに代わるもののが、今日ではマス・コミュニケーションだと言ってもいいと思うのです。

こうして全体社会といえば非常に複合的なようですが、これは分けて考えると、存外簡単ないくつかの側面に分解できるということになると思います。ただ今日の社会は今までになく非常に複雑な現象でありますから、それを研究するのは難しい。だから社会学者の中には全体社会というようなものを扱うのは科学的ではない。むしろ哲学であり、歴史であるという風に考える人もあります。尤もな面も勿論あります。しかしながらそういう全体社会というものが実は他の社会科学、経済学や法律学や政治学がそれぞれに研究している社会です。いずれもこういった広域社会を対象にしています。だから全体社会は、いわば 諸社会科学の共同のフィールドと言っていいと思います。従って社会学者は、その取扱いを避けることはできない筈です。例えば農村といいましても、日本の農村、中国の農村というようになってくるわけですが、そうすれば日本とか中国とかは一体なんであろう。社会学的概念で言えば、何に当るかと言うことになる。どうしてもそこに全体社会という概念を持ち込まなければならないことになります。単に「日本」とか「中国」とかが対象になれば、それは歴史学にとどまります。

VII 全体社会の研究—法則・運命・規範・潮流、相互補充・矛盾・相互内在化、カリキュラム

最後に、それらの研究の仕方、方針についてお話ししたいと思います。まず、産業というものをとて考えますと、全体社会の分業の中で一番重要なのは、産業的分野であります。それは、環境の事物、資源とかいうような物質的なものを予想しています。これらはそれ自身の法則によって生まれ、成立しているものであります。そこに目をつけて研究するのが科学であります。科学はそこの因果法則を発見し、そしてそれに基づいて技術を工夫する。技術は技術でまたひとつの論理的な構成を持ってくる。こういう風にして、産業というところには、法則とか理とかいうものの、物理学的、化学的さまざまの理の世界があることは言うまでもありません。文化の諸領域はまたさまざまな精神的価値法則がその基盤となっております。そして、そこには人間の組織も生まれますが、これはまた別個の問題になります。とにかくまず第1に理というもの、法則というものを人間は意識し、相手にしなければ社会は存立しない、ということになるのは勿論であります。

ところがさきの *community* は、さっき言いましたように、非常に偶然性を持っている、或いは我われは運命的に特定の *community* の中におかれます。これからいろいろな問題が起こってくるわけですが、つまり人間の選択の彼岸にあるものが我われの生活の基礎を作っているのです。先程夫婦ということを申しましたが、結婚の場合しきりに相手を選択するのは当然でありますが、しかしながら基本的にこれを決めるものは、非常に偶然的なものであります。つまり自分にとって親が何処に住んでいるかということは、自分の意志にとっては偶然であります。しかしながら、自分の住所によって配偶者は大きく決定されます、というようなことは一の例にすぎない。たまたま何処かで、例えば、北海道旅行で知り合ったというので結ばれた夫婦もありましょう。このよ

うな偶然的要因による関係は非常に多いわけです。しかし人間は、この偶然というものをしばしば運命として捉える場合があります。偶然ということには二種ありますて、まず法則通りにいかない、法則で説けないものがあります。法則とか理とかいうものは本来分析的であります。だから男女が結びついて子供が生まれる過程というようなものは、科学によって徹底的に説明ができるわけです。生理学的、生物学的に説明ができるわけです。しかしその根本に何故Aという男性とBという女性が結婚したかということは、分析的には仲々説明できない。たくさんの法則が会って出来ている具体的事象というものには、偶然性の概念を用いなければなりません。

よく言われる例ですが、孤が森の中を走っている、兎も走っている、たまたま兎と孤が会ったがために、兎は孤に喰われてしまう。お互いが自分の法則に従って動いているのであります。その両方の法則の出会いというのは偶然にすぎません。こういう問題を早くから言ったのはフランスのCournotです。Tardeが非常に尊敬し、その影響を受けた人です。タルドも非常にこの偶然ということを重んじています。元来フランスの学者は偶然性をよく言うようです。日本でも九鬼周造ー最近全集が出ていますーの『偶然性の問題』などいう名著もあります。この人もフランス哲学に詳しい人でした。ところで次の偶然があります。

人間は自分の目的によって動いております。例えは病気を治そうと思って薬を飲みます。しかし、その薬で中毒するというような場合があります。これは法則的に言えば十分説明できる、その人の体調と薬の持っている性質、人間の生理的法則といったものから充分その中毒症状は説明できます。しかし、それを飲んだ病人の意志から言えば、これは偶然であります。中毒を期待して薬を飲む人はおりません。こういうように自然法則に対しての偶然と我われの目的に対しての偶然という、ふたいろの場合があるのであります。しかしいずれの場合でも、これらは運命に転換することがあります。人間はしばしばそ

れを運命として理解するということがあります。動物にはそういう運命はありません。動物は、ほとんど自由意志よりは、本能に従って動いております。要するに必然的な動きをしているという様に一応言えるのです。また、神様にも偶然はない。自然法則すら支配しているのが神でありますから、そういう偶然などはありません。それを考えて我われは摂理ということを考える場合があるわけです。偶然と運命の問題は混み入った問題になります。今は特に偶然と運命に関する参考文献としていま参考にしました Simmel の “Lebensanschauung” という論集の「運命」という論文だけを挙げておきましょう。

ところで社会には私どもが運命としてうけとるのでなく、運命であるところのものがあります。自分で選ばないで帰属した社会があります。血縁社会、地縁社会と云うのは成員にとり、大体において運命的な集団です。法則というのに対して、要するに偶然的なもの、また運命的なものがあるわけです。結局必然と偶然という根本図式をそこに考えなければならないわけです。この必然と偶然ということは、社会だけでなく、一切の現象についても言われているのであります。

ところが、先程挙げた全体社会の組成の中には、2つの別な物があります。まず集団の場合においては、規制とか規範とか掟とかいったものがあります。全体社会にもまた、全体社会の生活を拘束している様ざまな枠があります。構造上の枠があり、行動上の枠があります。それでもって全体社会の機構とか組織とかいうようなものが成立しております。全体社会には安定した、あまり変化しない構造の面と、流動的な心理的過程の面とがあります。つまり organization の側面と communication の側面と言えるものがあります。organizationについては更めて言うまでもありません。communication もさまざまなもので行われています。人間というものは、日本で1億2千万の人口があれば、1億2千万の人々が、毎日少なからぬ部分をおしゃべりをして暮らしています。これは face to face の co-

mmunication がありますが、手紙や電話や或はマスコミの媒体などでのさまざまな交流も行われています。また無論人間を媒体とする交流もあります。これが communication の実態であります。これでもって全体社会に何等かの心理的な統一性とが成立しているわけであります。

そこで社会には、(1)必然と偶然、体験的には法則と運命というようなことにもとづく関係や構造があり、また(2)法ということばで代表させられる規範、制度、組織があり、さらに(4)の communication によって絶えず動いている勢とか潮流とかいう流動的なものがあります。そこで結局 4 つの観点がいまとあることとなります。それを私は、(1)法則と運命、或は法則と偶然、(2)規範と潮流というように言っております。規範と潮流というのは社会にあり、法則と偶然というのは社会以外の現象にもあります。社会を超えたところもあります。

従ってこの 4 つの事柄が我われの全体社会を考える場合の観点となってきます。このことは社会学以前から東西を問わず気づかれていたことで、この 4 つのことを前提に置いた理論というものは、東洋にも西洋にも非常に多いであります。すでに我われの行動においても、これらのこととが関係しております。われわれが何かを決断しようと思うときに、まず自分の撰ぶ行為に達成される客観的可能性があるだろうかと、理の面から考えます。また、それは自分にふさわしいであろうか、自分に与えられている個性、能力に対して適当だろうか、ということを考えます。自分の持っている能力にはいろいろなものがあります。たがいに違った方面への能力が人にはそれぞれあります。これを我われは運命的に持っていると考えます。自分の取ろうとする方針は自分の素質、性格、能力にふさわしいか否かということを考えます。それからこうすることをやって社会の規範に触れる事はないだろうか、人々から非難されはしないだろうかと考慮します。さらに世の中の風潮から考えて、これは今日歓迎されないのではなかろうかななどということも考えるでしょう。要するに 4 つの点

といふものから考えられて、人間の社会的行動といふものは決まってきているわけです。こういう 4 つの事柄を中国の言葉で理法勢命と言っています。法則の面が理であります。運命の面が命であります。規範の面が一般に法と言われていると思います。時の流れ、風潮が勢であります。それで理法勢命という言葉が出来るわけです。規範と勢は今の言葉で言いますならば、社会の構造的面と流動的面です。

私はドイツ語の場合は語呂を考えて Gesetz (法), Geschick (運命), Norm (規範), Strom (潮流) と覚えやすいように使っています。

理勢乗除という言葉があります。理の要因と勢の要因との動的関係のことです。これは理法勢命の乗除と今は考えるべきです。乗除はかけ算と割り算です。これはまず相互に補充強化し合う関係と相互に矛盾する関係と言いかえてよいでしょう。社会にはまず相互補充強化の現象があります。異った要因が互いに補充し合うのは、例えばさきほど言いましたような集団の規制の面と我われ意識といった人々の間の心理的面とあります。この 2 はお互いに補充し合うものです。

つぎに相互に矛盾し合う面があります。矛盾というのは大体 3 つあると思うのです。第 1 に、社会と個人の間には根本的に矛盾があります。社会のためと個人のためという 2 つのものの間で人間は葛藤を意識するということは言うまでもありません。社会にはその統合への必然性があると共に、個人もまた主体性をもつ中心であるからです。

第 2 には、停滞という矛盾があります。停滞は、滞る、lag です。例えばいろいろな分業の分野がありますが、ある種の分業はグングン進んでいるのに、他のものは遅れをとっている。物質文化は急速に進むことがあるが、精神文化はそれに対して遅れをとるとか、或はこういう物質文化を制御しつつ用いるいわゆる適応的な culture というものは相対的に遅れるという指摘があります。これは停滯矛盾であります。

矛盾にはまた、相手があるというそのことで対立

をつよめるというような関係があります。いわば人が東へ行けば自分は敢て西へ行くといった様な関係で、対抗矛盾と言えるものです。対抗的関係は対抗のための対抗となって極端化し易いものです。これは社会関係というものに内在している矛盾と云えます。

さて3番目に様ざまな要素の間にお互に内在化し合う関係があります。例えば規範と我われ感情の関係で考えるならば、ここには相互的な、お互いに補充し合うような関係がありますが、また同一の規範を重んじているということでもって、我われという意識を高められる場合があります。これは吾々意識と規範が相互に内在化しているわけです。これは相互内在化の関係です。

全体社会には *community*, *organization*, *communication* という3つの側面がありますが、既述のようにこのコミュニティーは運命的な性質をもち、オーガニゼーションは法則や規範に依存しており、またコミュニケーションは潮流、時の勢力をにぎうものです。そこで、この三者の間に過程する相互補充強化、矛盾、相互内在化ということが全体社会を考察する場合の問題となるといえましょう。

さて今まで述べました中で、私は時間論によく言及しました。全体社会を構成しているコミュニティー、オーガニゼーション、コミュニケーションもやはり時間的性格を異にしていることが、附け加えられるべきでしょう。コミュニティーは人々が作為するというよりは、先に人々に与えられているという性格をもっています。そこでそれは過去的なものと性格づけられるでしょう。オーガニゼーションは社会の現在的側面です。意味的にはそれは現在の課題の

処理を成立の根拠としているからです。またコミュニケーションはつねに新しい状態を起動する要因であり、多元性をもっていますから、予測を越えた展開をまねきます。それは未来的性格の要因であると云ってよいでしょう。

社会の変動をになう集団は別個の平面の問題ですが、やはりこの三者に対応的に区別されます。例えば部族の反乱などはコミュニティ的集団の活動であり、軍人のクーデターなどはオーガニゼーションの集団逸脱であり、階級的斗争などはコミュニケーションによる団結の活動であり、それぞれ過去的、現在的、未来的と形容出来ます。そこで私はそれを前集団、現集団、後集団とそれぞれ名づけておるのであります。しかしこれについてはここで詳論を省きます。

さてこの学部のカリキュラムと右の全体社会論との関係については、最後で時間がなくなりましたので、一言するだけにとどめます。

農村社会学とか、都市社会学とかいうのは、コミュニティ研究であることはいうまでもありません。またコミュニティーは住居の集合態であり、生活の場ですから、社会福祉ということは主としてコミュニティーを場とすると云えましょう。産業や文化の分業的、専門的活動領域に関する産業社会学や、文化社会学はオーガニゼーションに対応し、マス・コミュニケーションの研究が全体社会のコミュニケーション研究であることは自明でしょう。社会学部のカリキュラムは非常に多彩です。しかし全体社会の構成の立場で考えることは、それぞれの学科目の間の関連を見る上での近道ではないかと思います。